

利のTさんが、ぶる／＼出る汗を拭きながら、いつ迄滞在するかと行きなり聞くから、たゞ三四日の積りと答へたら、大袈裟に驚異の風を示して、日本の兵は然く神速を尊ぶかとしやれてかゝる。油斷はならぬ。ホテル・ホンガリアといふのに泊る。部屋から眺めるとワイン以來馴染のドナウは、益幅を擴げて、並木通り一つを隔てゝ、相變らず音も無く洋々と流れて居る。河の向は挹翠の間に以前の王宮を初め諸官衙隠見する、恰好の好いブダの丘陵町で、之を取り巻いた城壘にも、古い歴史の色が漂ふ。ペストの町との間は、ドナウに架した幾筋かの華麗な橋梁で連絡されて居る。此の丘と此水とを骨組にして築き上げられたブダ・ペストの市は、それ自身一つの美術品とも見られる。

歐洲諸國遊歴の間には、人工の美を加へた都市は幾つも見たが、かくまで自然の配合の妙を得た都市は無い様に思ふ。たゞかく自然の飾り成した都にも、自分の嫌な暑さは少しも容赦無く迫て来て、日没後にも一面に鋪きつめた焼け石の放射する熱は依然として七十年目の猛威で攻めつける。目の前を汪洋と流るゝ水もまるきり油の様で、微風すら起し得ぬのが恨めしい。逆も部屋の中には居れぬので、Tさんと一緒に外に出る。

聞き馴れた英佛獨伊などの言葉の外に、前後して歩いて居る人々の語り合ふ言葉には、自分には譯の分らぬ匈牙利語は無論のこと、トルコ語もあれば、露西亞語もある。色々の事情で諸國から入り込んで居る人々が、皆家内の暑熱を此の河岸に逃げ出して居るものと思はれる。かうして中にもTさんと自分との變り方は、著しいと見えて、絶えず是等の諸君の注意の目標となる。宿から僅か、一町許り此の河岸通りを上つた處に、半町四方位の廣場があつて、其の一方には料理店が並んで居る。夕食を認める爲にそこに入つて行く。入るといへば家の中の様である